

復活にあやかりたい

主の復活を祝うイースターの朝を迎えました。毎年、イースターの日には巡りきますが、こうして一緒に礼拝を守ることの出来る顔ぶれは変わります。昨年 of イースターの後に、天に国籍を移された方がおられます。新型コロナウイルス感染症対策のために礼拝に出ることを自粛しておられる方々もおられます。去年 1 月 16 日に国内最初の感染者が出てから、わたしたちは「たとえ死の陰の谷を歩むともわたしは災いを恐れません。あなたがともにいてくださるからです」という詩人の告白を、日々わたし自身も告白しながら、御言葉を支えとして、歩んできたことを思います。三密を避けよ、不要不急の外出は自粛せよ、との掛け声の中にあっても、肉体の命が守られることをこえて、礼拝をささげて生ける神を仰ぎ、同じように主にある兄弟姉妹と、御言葉を分かち合う賛美と祈りの交わりが、わたしたちの霊と心に欠かすことが出来ないことを知らされました。そして、そのことはまさに今、続けて読んでおりますフィリピの信徒たちへの手紙のなかで、パウロとフィリピの信徒たちの置かれていた距離感に近いものがある。この手紙には牢獄の中で死を意識せざるを得ない状況の中に置かれたパウロのあらかず喜びという驚くべき消息があります。キリスト・イエスに結ばれ、信仰の命を与えられることが、苦しみと死の陰のはざまにあって生きる人間への励ましとなっています。そこでイースターを迎えた今朝は、この手紙のなかから、パウロがキリスト・イエスの復活からどのような励ましを受け、彼自身の生き方を神に向かうものとしたかに聴き、わたしたちも復活信仰の与える希望の力に与りたく願っています。

パウロは初め、イエスをキリストと認めない者でした。今日

読みました3章にはパウロの自己紹介が記されていますが、そこに自分は教会の熱心な迫害者であったとあります。そういう経歴を持っていたパウロが熱心な伝道者として生まれ変わったきっかけが復活の主との出会いでした。キリスト教の世界伝道に果たしたパウロの活躍は巨大なものですが、彼は遅れてきた弟子であり、いわゆる十二弟子のひとりに数えられてはいません。生前のイエスさまとは面識がないのです。だから彼がイエスを主と信じる者へと変えられることは、神さまの働きかけなしには有り得ませんでした。この出会いによってパウロは生まれ変わったのです。人間的に様々な自慢できる経歴や出自を、わたしは持っていたけれども、わたしの主イエス・キリストを知ることのあまりの素晴らしさに、そうした一切のものを損失とみなすようになった。塵芥に等しいとバツサリです。パウロはユダヤ教の熱心な信徒であり、それゆえにナザレのイエスをメシアと告白する一派に対する厳しい迫害者でした。純度100%の、まじりけのないユダヤ教徒であることを誇りとしていた人物だったのです。その彼がキリスト者をつらぬくためにダマスコに向かう途中で、主イエスに呼びかけられるという召命を体験します。これがパウロの人生を180度変えてしまうのです。使徒言行録の記述によれば三日間目が見えなくなり、やがて目から鱗のようなものが落ちて再び見えるようになったと記されます。目から鱗の諺の語源はここですが、それまで彼が自分の目でみて吸収し、蓄積してきた知識や価値の体系が、丸ごとひっくり返った瞬間でした。これまでクズと見えていたものが宝に、これまで誇りとしていたものが一銭の価値もないものになりました。まさに天地が逆転したのです。いわゆるこの世の算盤勘定、コストパフォーマンスといったものでは測れない人生の価値に目を開かれたのです。これを信仰によって得ら

れた知恵とってよいでしょう。こうして復活の主イエスに捉えられたパウロは、苦しみや死といったわたしたちが人生においてマイナスと考える出来事を、キリスト・イエスの恵みの光のもとで全く違った姿で捉えるようになります。この手紙は全体で4章からなりますが、1章では投獄されていてもそのことを悲しみ、嘆くのではなく、福音伝道の前進に役にたったと喜ぶという、吃驚するような消息が牢の中のパウロから発信されます。投獄されたパウロを慰めるつもりで手紙や援助を届けた信徒たちは、逆に折れないパウロの姿に、自分にとって生きるとはキリストであり、キリストにあって死ぬことも益なものと語るパウロに、驚かされたでしょう。苦しみや死に対するパウロのこの処し方が、この3章でついにキリストの復活と結びつけられることにより、それがパウロの希望であり、目的であることが明らかにされます。すべては死者の中から復活されたキリスト・イエスとその力を知ったがゆえに、苦しみと死に瀕した境遇にあっても、死の陰の谷を歩むような状況にあっても、わたしは喜べる、とその根拠を明らかにし、あなたがたも喜びなさいと復活の希望に与る喜びへと招くのです。パウロは、死がキリスト・イエスの前に敗北したことを知らされ、死がすべての終わりではなくなったことを信仰によって会得したのです。この信仰による知恵を得たことで、彼は世界をまったく違った角度で見るようになってきたのです。

それはまるで15世紀の大航海時代とよばれる地理上の発見の時代、一足はやくに大西洋に乗り出したポルトガルとスペイン、イベリア半島の二つの国は、新大陸から次々と新しい富を自国に持ち帰ります。世界は未知の驚きに満ち、持ち帰られた果物や、動植物はヨーロッパの人々を驚かせました。外の世界がある、自分たちが生きているよりも世界ははるかに広大で未

知の領域がある。それは明かりの不十分な狭い小屋のドアが不意に開けられたような衝撃でした。その当時、冒険者たちが乗り出していったかつての港のひとつに「その向こうにまだある」と刻まれたモニュメントが立っています。「その向こうにまだある」、いい言葉ですね。パウロが罪と死の支配に閉じ込められていた人間が、キリスト・イエスに結ばれたがゆえに、その軛から解き放たれたことをどれほどの喜びとしていたか、死が終わりではなく、眠りに変えられ、罪の報いに怯えるのではなく、主の赦しの愛を頂いて感謝して委ねてよいことを知った感激、認識の変化もこれと同じです。死をキリスト・イエスの十字架と復活を通して見ることで、パウロの生き方は根底から変えられたのです。以前、夏期集会で「ルターに聴く死への準備」という学びをしました。そのなかでルターは「わたしたちは死という狭い門をくぐって、この世の生活から抜けていくが、死は新しい誕生であり、この世よりも大きな世界と喜びが存在することを信ぜよ」とまず語りかけます。「その向こうにまだある」ということですね。キリストの十字架と復活の御業のもとに立つことで、わたしたちは、死は終わりの苦しみではなく、産みの苦しみに変えられたのだと信じることが許される。そして、この終わりの問題が解決されていることによって、今の生き方も変化を始めるのです。それをパウロは3章で自分自身の人生の変化として語りました。それまで価値あると思っていたものが損失となり、塵芥に等しいものとなる。苦しみに見えているものが、キリストゆえの苦しみであることによって、命に続く道を歩いていることが明らかになる。10節でパウロが「わたしはキリストの復活とその力を知り、その苦しみに与って、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したい」と述べているのは重要です。「苦しみに与る」「キリス

トの死の姿にあやかる」とは普通なら理解し難い考えでしょう。「あやかる」というのは、感化されて同じようになること、自分よりも優れた人の徳や幸せにあずかって、自分も同じものを得ること、そういう使い方をします。そして、ここでパウロが語った生き方の変化は、実は、2章6節以下の「キリスト賛歌」の彼なりの受け止めであったことが分かります。もう一度、あのキリスト賛歌に聴きます。「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」

パウロは、自分も誇ろうと思えば誇れなくはない、と断って、自分が生粋のユダヤ人であり、律法においては非の打ち所がない者であり、パーフェクトな存在であったが、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりの素晴らしさに一切を塵芥とみなすようになったのだといいます。このパウロの表現はキリスト賛歌に示されている主イエスのように、神に選ばれた民であるユダヤ人の身分でありながら、それに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、みずからの誇りを捨てて、キリストの死の姿にあやかろうとしている。牢獄の中にあっても、キリスト・イエスの教えに従って生きた結果がこれなのだから、自分は何んら恥じることも、恐れることもない。被造物である人間は死を免れることはできません。しかもその死はみずからの生き方の見当外れによって招く後悔や、恐れに彩られて、刑罰の意味合いを帯びてくる。みずからを失う恐れもある。そういうわたしたちを脅かす死ではなく、キリストの十字架によって、わたしの罪は覆われ、死の棘は抜かれ、

さらに復活の御業によってキリストの命のうちに死は飲み込まれたことを知っている。わたしは復活の主に繋ぎ留められている。これにあやかりたい。そのためにキリストの歩んだ道、服従の道、御言葉に身を沿わせることが永遠の命への道であることを会得したのです。その向こうにまだある大きな世界、イエスをキリストと信じて眠りについた先達たちと再び見えることの許される希望をもって生き抜いているのです。パウロは、このようにイエスさまの復活から励ましと力を頂いて、与えられた持ち場を懸命に生きたのです。様々な苦難の中にあっても、罪と死の問題を主イエス・キリストが十字架と復活の御業によって解決してくださったことを繰り返し味わい、祝い、喜ぶことで、牢の中でも平安に守られた。こうしてパウロは、キリストの復活の消息によって生かされることによって、彼自身も、主の復活の証人として用いられたのです。わたしたちの先人たちもこの消息に生かされ、あやかって生きました。だからここに主の教会、半田教会が立っています。フィリピの教会と同じです。イースターは死が終わりではなくなり、神の赦しの愛ゆえに、「その向こうにまだある」広い世界を望み見て喜ぶキリスト者に許された祭りの日です。すべての人をこの恵みの出来事に招きたく願います。

お祈りいたします。